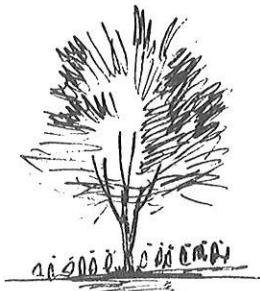


ひかりのこ

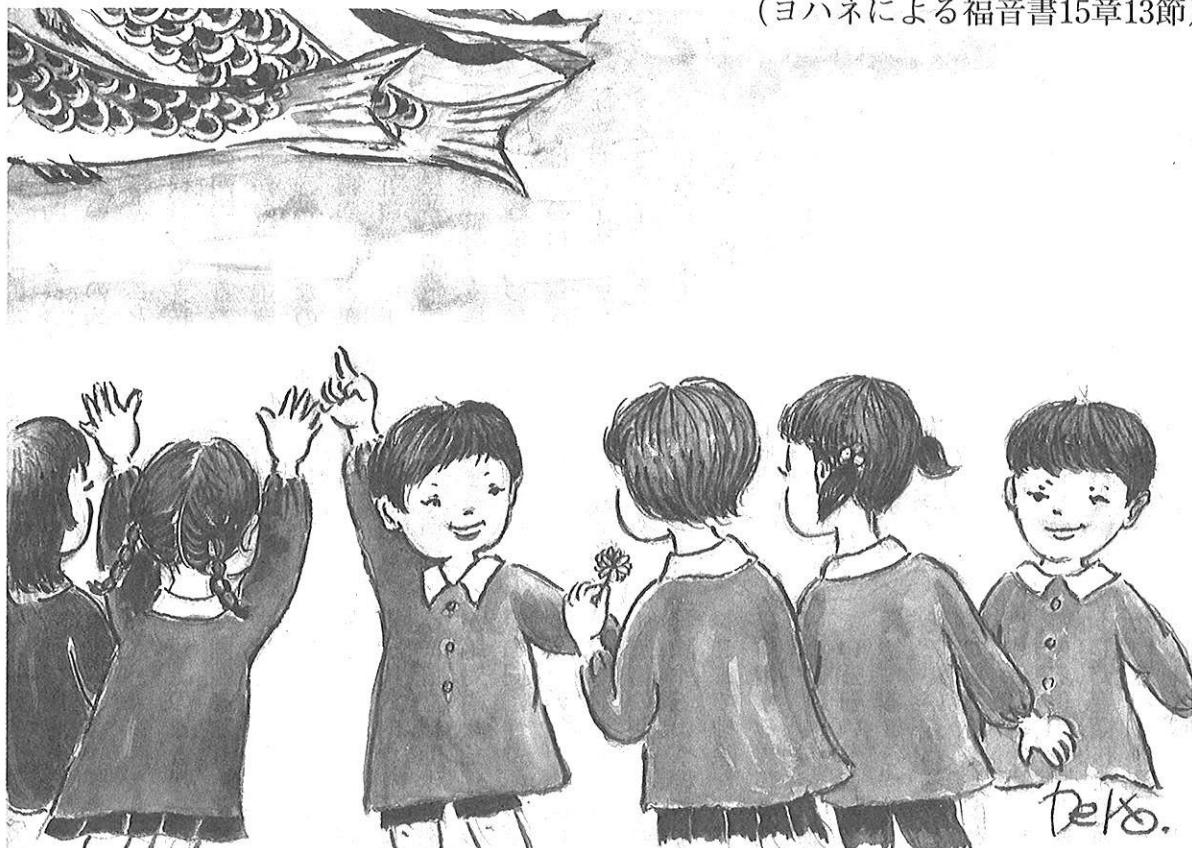
光の子



No.142 2010.6.15

●年間聖句 友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。

(ヨハネによる福音書15章13節)



「こいのぼり」

挿絵・中島英子

「田螺」

鉄橋をはさんで山とげんげん野

忘れぬ刻を深めてげんげんし

青空の真下に平らげんげん田

陽炎は野に立ち屋敷森に立つ

遠足の百足のごとき五十人

放浪もなし変身もなし田にし

田にしには田にしの大志あるごとく

落合
水尾

(「浮野」主宰)

妻の受傷

理事 仙道 富士郎

妻の姿は見えて、シモンのアパートメントのドアノブの向こう側に、ノンターの蔭から彼女の声がする。行つてみると、彼女は倒れたまま呻いている。転んで腰を強打し、動けなくなつたという。なんと転んだ理由が、私が床に放つておい

そのあとの時間的な経過は良く記憶していない。事の順序としては、電話を掛けてきた奥さんが、すぐに駆けつけてきてくれて、保健師の資格を持つ彼女はあれこれと応急処置をした後にJICAの保健管理員の方を呼んでくれた。間もなく、日系の整形外科の医師が駆けつけて来てくれ、骨折の疑いの診断をしてくれたということになる。この間、一応医師免許を持っている私はおろおろするばかりで、ただ皆の脇に突つ立つていた。救急車で彼女は病院に運ばれ

国に援助に来ていて、その途上国の医療は受けられないと思つてしまふ。しかし、時間はない。手術を担当する予定の医師がやつてきた。ダニエル先生といい、アコニシオン大学医学部の名誉教授である。大変助かつたのは、流暢な英語を話し、全て英語で用が足りたことである。いま思うと私は上位礼な質問もした。「あなたの手術の感染症の合併率は何パーセントか」、彼はむつとしたよう顔をして「二パーセント以下だ」と答えた。



(以下次号)

その日付は、もう大分経つたまでも覚えている。それは二〇〇九年十一月十八日に起こった。午前八時三〇分、ベッドで仮眠を取っていた私はサイドテーブルの上にある電話の音で起こされた。老

たオレンジを入れたナイロンのネットの上で滑って転んだのだと言ふ。実は、その日午前三時に起床した私は、所在なさに冷蔵庫の前に置かれたオレンジが半分ほど残っているネットからオレンジを取つて、無理やり冷蔵庫の中に入

私はそのあとを医師の車に乗せてもらい、追走した。後の妻の話では、穴ぼこだらけの首都アスン・オンの道路をスピードを出して駆け抜ける救急車のなかで、死ぬところへ向かうと思ふほどの痛みをこらえ続けた。

決め手は妻の言葉であった。「私はパラグアイに住んでいるのですから、ここで手術を受けます。」しかし、事は更に複雑で、どういった処置をするかは、JICOの契約の障害保険会社の許可が必要である。教え子の整形外科医の話からして、次の日にも許可が下りないようだつたら、自費でも、と思つたりしたが、翌日許可是下りた。十一月十九日、午後七時から、手術は始まつた。妻は「もし万が一手術で亡くなつた時は、まず神父さんを呼んで、お祈りをしてもらつて下さい」と私に言つて手術室に入つて行つた。彼女の家はカトリック信者なのである。

子どもの福祉という名の権力の場

評論家 芹沢俊介

活費として支払うこと、夜十一時
の門限を守ること。これらの入所
条件のうち主要なものが仕事つま
り「就労」なのである。

自立援助ホームは入所してくる
十五歳から二十歳までの子どもの
「自立生活支援」を目的としてい
る。「就労」支援もそこに含まれる
という位置づけなのだが、実際に
は右の自立援助ホームでは、三ヶ
月以上「就労」しない状態が続く
と、子どもを児童相談所に返すと
いうことであり、「就労」が支援で
ある以前に絶対的な条件になつて
いることがわかる。おそらく全国
に六十カ所近くある自立援助ホー
ムのほとんどにおいて、「就労」し
ない子に対して同様な対処法がと
られていると考えてまちがいない
だろう。

さらに重要な現実がある。それ
は、自立援助ホームに措置されて
くる子どもたちのうちに児童養護
施設に在籍していた子どもが少な
くないということだ。その子らは
児童養護施設で暮らしていくけれ

以上のことから私が突き当たつた問題をとりあえず「二つに整理できる」と思う。

一つは、児童養護施設では、高校通学が施設に「いることができる」絶対的な条件であり、同じくうに自立援助ホームでは、「就労が絶対的な条件であるという、規範の同一性である。こうした規範は、その子が施設にふさわしいか否かを判別するはらたきをする。不適格の側に判別された子どもを排除するよう機能する。

ここで排除ないし締め出しとして作用する規範を別の言い方で現せば、「する」が「ある」に先行しているということになるだろう。通学すること、就労することが、そこにいられることの絶対的な条件であるとき、子どもたちは締め出されないために自分がいま抱えている現実を差し置いてまず、こうした要請にこたえなくてはならないだろう。職員もこうした規範の要請に応じて、通学させる、就労させるというかかわり方を優先

旗語と自立援助ホームの三角形の連環構造である。この連環は排除の仕組みとして一括置変更ということだ——児童養護施設→児童相談所→自立援助ホーム→児童相談所という方向性をもつていてることがわかる。

何を言いたいのかというと、誰がどんなふうに言い繕おうと、児童福祉の場が排除するわち子捨ての構造に貫かれた権力の場そのものになつていること。そしてこうした事態は「ある」が「する」に先行しなければならないという命題が現実化するまで、言い換えれば「する」が「ある」に先行しているという事態に終止符が打たれるまで、統くであろうということである。このような権力の場の解体を養育論は視野に入れる必要があるのであり、そのとき、子どもとともに、子どもの傍らに居続けるという理念を自らに課している光の子どもの家のあり方が、私には一条の光となつて見えてくるのである。

気になつてしていることを書いてみたい。神話的に名の知れたある自立援助ホームでは子どもと入所時

ど 高校を中退したため 施設から
らの退所を余儀なくされ、児童相
談所に戻された、そして自立援助
ホームに移ってきたというのである
以上のことからも、笑き当た
る。

う。することにならざるをえないいたゞり問題の二つ目は、措置権を握る児童相談所を頂点とする児童養護

「これで、この部屋にヘタな作品さえなければ、もっと良いのだが。」と言われそうだが、そうはないかない。本来、制作をする場所であり、同時に作品の一部を保管する場所もあるからだ。

「きょうは、道端で描いていた
んですが、いろいろな人が立ち止
まって見ていくんですよ。何だから
恥ずかしかったですね。でも、そ
れよりも寒くって寒くって参つち
やつたんですよ。」と言ふ。
　Mさんの絵に対し、私は指導
助言などというのはおこがましい
ので、私なりの感想を申し上げる
ことにしている。

エツセイ

コーヒーを飲みながら

従つて、そうやたらに人を入れな

いろいろな人が遊びに来る。自
私の場合はそう堅く考えてはいな
い。

て。 絵を描く人が来る。ヒマで仕方ない人も来る。時には、上品な、きれいな女性の訪問もある。そんな時には、アトリエが明るい楽しい空間になる。もち論、音楽を流し誰でも迎え入れる。ヴァイオリンをやる人が来る。俳句の人があるで制作をしていない時であれば

彫刻家
中島
睦雄

周易家
中島
睦松

Mさんは、クラシック音楽が

来る間にハロ・タ音楽を流して迎えることにした。

Mさんは、四十号という可成り大きな風景画を持って、懐中電灯で足もとを照らしながらやつて来

部屋に入るなり「お！きょうは
バロック音楽ですか。」と、こち
らの意図に反応してくれた。

んですが、いろいろな人が立ち止まって見ていくんですよ。何だか恥ずかしかつたですね。でも、そ

Mさんの絵に対し、私は指導助言などというのはおこがましいので、私なりの感想を申し上げることにしている。

娘を身籠った頃から、私はある情景を夢見るようになった。娘を貞中に親子三人並んで手をつなぎ、夕焼けの中を散歩するのだ。ありふれた情景かもしれないが、私にとつてそれが「家族」の情景であり、幸せの象徴のように思われた。娘が産まれ、待ちに待つた家族三人の生活が始まった。そのささやかな夢がもうじき叶うものと、私は信じて疑わなかつた。

わかつたのは、二歳を目前にした去年の夏のことだつた。その頃の娘はコミュニケーションというものが全くそれなかつた。名前を呼ばれてもまるで聞こえていないかのように無反応。人に無関心で、目を合わせようともしない。いくつかの単語は口にするようになつたが、独り言ばかりで会話とはほど遠かつた。公園に遊びに行つてもお友達には目もくれず一人で走り回つてゐる。親の制止も振り切り、いきなり道路に飛び出していく。道端に座り込み、側溝の

穴に小石を拾つては落とすことに没頭し、いつまでもその場から離れようとはしない。部屋の中では片っぱしからおもちゃを散らかしては投げ捨てる。周りから娘の至らなさを指摘されても、私の言葉に何の反応も示さず意思の疎通が全く図れない娘を前に、ただただ途方に暮れる毎日だつた。私は疲れ果て、娘を育てていく自信を失つていった。いつしか、ささやかな夢のことなど心の中から消えていった。

れば嬉しい。障害がある無しに関わらずどの子も、大人でもね。」

その日を境に、我が家ではどんな些細なことでも「できたね」「えらいね」と手を叩いて大げさに褒めるようになった。藁にもすがる思いで始めたこの「褒めちぎり育児」は、娘の中に何かをもたらしていったように思う。いつの間にか表情が柔らかくなり、笑顔が増えていったのだ。何より、朝から晩まで褒めている私自身が楽しく、娘の笑顔につられて笑うことが増えていった。

このころ一番の悩みと言えば、娘が手をつなぐのを嫌がることだつた。外に一步出した途端に、いきなり走り出すのでとにかく危ない。車の多い場所では娘を羽交い絞めのように抱いているしかなかつた。触覚過敏があるのか、娘は手を触られることを極端に嫌がつた。この子と手をつなぐことなど一生出来ないものと、私は諦めていた。

ある日の夕暮れ、近所の公園に夫と娘と三人で散歩に出かけた。そこはひと山そつくり自然公園になつており車が入れないので、ここに来るとき好きなだけ娘を走り回らせてあげることができた。夕焼けがとてもきれいな日だった。そのときふと、娘が私の手に小さな指をからめてきて

そのまま私の手を引いて歩きだしたのだ。私はびっくりして夫の方を振り返った。「毎週日曜日に、こつそり二人で練習したんだ」夫は少し得意げに言つた。「最初は手を握るだけ、次は三歩だけ、五歩、十歩、ちよつとでもつなげたら褒めてたんだ。そのうち自分から手をつないでくるようになつたんだよ。」思いもかけない言葉だった。そう、娘はゆくりとだが着実に成長してくれていた。娘の持てる力を信じることが出来なかつた自分が恥ずかしかつた。私の横で、娘は眩しそうに夕日を眺めていた。

どの子にもきっと、それぞれ歩調があるのだろう。のんびり歩く子、寄り道が好きな子……そして親にもまた、それぞれの歩調がある。親と子も、そして夫婦も、異なる互いの歩調を図り合い、つまずいたり転んだりしながら、共に歩んでいくものなのだろう。それがいつしか家族の歩調になつっていく。我が家はのんびりがいいなと、そのとき思つた。

初めて親子三人で手をつないで眺めたその日の夕焼けは、それまでに見たどんな夕焼けよりも眩しくてきれいだつた。

みちる

いんだから。絵なんだから。」
そしてまた、雑談になつていいく
音楽は静かに流れている。
テーブル代わりに使つてある回

ケースをあけると、三本に分かれた金管が、ピッチリと納まつてゐる。これを取り出して一本につなごうとした。「あれ？ こうかな？ いや、こうらしい。ダメだ。」などとつなぎ方もわからない。二人で大笑いである。

こうなつたら、もう、バロックもへちまもあつたものではない。

女を彫刻で作るために、質流れの安物を買ってきて、姪っ子にこれを持たせ、ポーズしてもらつたもので、それつきりケースに入れたままになつてゐる。

「あの「フルート」は?」とMさんは、私はMさんをからかって「いや私はね、フルートはプロ級なんですよ。」と言つてみた。オヤ?といふ顔をしたMさんに「いや、ウソ。全然吹けないんですよ。」と白状しなければならなかつた。実は、以前、フルートを吹く少

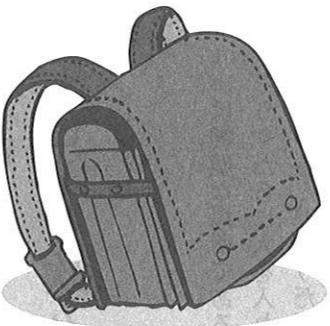
転台の上に
いてある。「ハーモニカが三本置
ですか?」「いや、急に思いつい
て探し出してみたんです。子供の
頃吹いたから。でも、実は楽譜が
全然読めないんですよ。」などと
やつていると、向うの机の上に置
いてあるフルートのケースにMさ
んが目を止めた。

5

原田家日記

新年度に入り、子どもたちも学年がひとつずつ上がったり、入学を迎えることになりました。

北斗も小学校へ入学しました。



斗。素直に話を聞けなくて先生方にはたくさんご迷惑をおかけしました。ある時は、幼稚園で熱を出してしまい、先生が家へ連絡しようとすると「家へ帰りたくないから電話しないで」と泣いて頬み困らせたこともありました。

卒園式も終わり春休みになつてからは、夜寝る前に「幼稚園のこ

「幼稚園大好き」の北斗が小学
校入学を無事迎えられるだろうか
と忘れないでいた。「心の中でいつ
も思い出せば忘れないよ」と答え
ると「そうか！」と嬉しそうにし
ていました。

立派に大役を果たしました。
入学式が終わり、家へ帰つてから式に参列していた施設長にもどう褒められました。
いいスタートになつたね、北斗
おめでとう。

池田
祐子

A detailed black and white illustration of a bird's eye, likely a hawk or owl, looking directly at the viewer. The eye is large with a prominent iris and pupil. It is surrounded by dark, textured feathers. The style is reminiscent of traditional Japanese woodblock prints.

佐藤家

三月二十日に光の子どもの家の卒園生を送る「出発（たびだち）の会」がこれまでお世話になつたたくさんの方々と共に三名の新たな出発を盛大にお祝いしました。この会の中で、卒園後は大学近辺で下宿生活をする憲也に光の子どもの家自立進学基金代表の芹沢俊

穴水
祐介

介様より一年間の家賃・食費を贈呈していただきました。芹沢先生からは「大学なんて面白い所ではない。理想を抱かず四年間で卒業するなんて考えるな」とメッセージをいただき、少し気が楽になつたと思います。

当初は心配して送り出しましたが、憲也が新しい環境の生活に早く慣れるようにと、三月の中旬より下宿での生活を始めました。何度か下宿先を訪ね食事づくり・アルバイト探しなど積極的に動いている様子を見てひとまず安心しております。四月に入り入学式も終え、友人との交流も始まり大学生生活を楽しんでいるようです。憲也には、充実した学生生活を過ごし後に続く者達の刺激となるよう歩んでほしいと伝えていきます。憲也の影響もあり遅ればせながら、弟の誠も国際協力の勉強ができる大学に進学したいと勉強を始めました。努力して自身の目標をかなえられるようにサポートしていくことを思っています。

子どもたちの季節
仙道宮

春は出会いと別れの季節。仙道家でも長男として家を支えてきた龍治が大学進学を迎えて自宅へ帰る事となりました。いつも座っていた席には龍治の姿はなく、空いた席から寂しさを感じた三月上旬。しかし、四月に入るころには三歳の女の子が入所し以前より騒がしい仙道家となりました。やんちゃが売りの彬や智司が世話を買って出る姿には、成長を感じて嬉しくなります。

河のほとりで

二歳の裕葵は倉澤家のアイドルです。

倉澤 智子

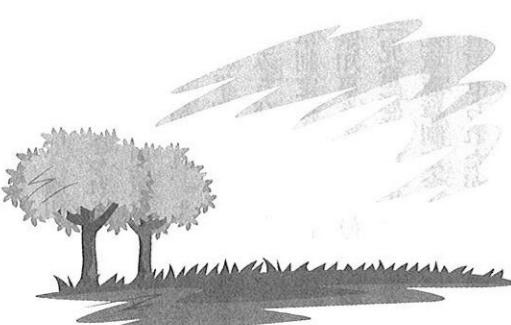
しかし要求される側は大変。絵がうまく描けないと、こんなのはウルトラマンじやない！と言わんばかりに泣き、歌詞がよく分からず適当に歌うと、そうではない！と怒り：。周囲の者たちはウルトラマンの絵を練習し、歌をダウンドアードして覚えるという、たゆまぬ努力を続けています。

そんな正義の味方にあこがれる彼自身も、実は悪を憎む正義の味方なのです。

牧野由紀子

また今年は高校受験を控えた宗太がいます。埼玉県では受験制度が大きく変わり、公立高校の授業料無償化も重なって、公立高校に入る事がとても難しくなりました中学三年生になり、以前よりは学習に対しての姿勢に良い変化が見えてきてはいるのですが、眠気や受験に立ち向かうにはまだ心細い状態です。一年を通して苦難と向き合う姿勢や乗り越える強さを学べるよう進めていきたいと思つて います。

そんな正義の味方にあこがれる
彼自身も、実は悪を憎む正義の味
方なのです。



季節のおとずれ

竹花家

「友達五人できたよ！」と台所に立つ私の後ろにぴつたりとくつついで話しつづけます。

まだまだ新しい環境は緊張の連続で、夕方になるとダイニングでウトウトしていることも…。慣れてしまえば当たり前の日常。それらがキラキラ新鮮に見える「今」を大切に過ごして欲しいと思いま

新学期が始まりました。竹花家では清貴が高校に入学し、楓が幼稚園に入園しました。担当者としては毎朝見送った後「電車間違えずに乗れたかな?」「無事学校に着いたかな?」「給食全部食べられたかな?」と帰宅するまでドキドキしつばなしです。新しい環境の中、体験すること全てが新鮮なふたりは、帰宅後、毎日いろいろな報告を聞かせてくれます。楓は「今日はね~粘土とブランコやつたんだよ!給食ははんぺんが出たよ」と幼稚園から家までの帰り道、手をつなぎながら楽しそうに話してくれます。清貴も「今日は

